

全難言協が考える「専門性」について

前全難言協事務局長 阿部厚仁

1. はじめに

今夏の全難言協全国大会近畿大会のパネルディスカッションで、私は全難言協の前事務局長として出席し、全国の状況を踏まえながら、全難言協が考える「専門性」について発言しました。

すると、その会に参加されていたNPO法人全国ことばを育む会の加藤前理事長から、今回の原稿依頼の話がきたのでした。

パネルディスカッションでは時間の制限もあり話し切れなかった点も含め、ここで改めて私の考えを述べさせていただくことにします。

2. 全国の状況

全難言協が毎年実施している「全国基本調査」から見える「専門性」に関する課題は、大きく分けると

- ①専門性を学ぶ研修の場が少ない。
 - ②研修に行けない。
 - ③専門性を維持する人事異動が行われない。
- の3点になります。

そして、「専門性」の課題と合わせて取り上げられるのが、「経験年数（の短さ）」と「一人担任」の課題です。

「一人担任」の課題に関しては、昨年度の全国基本調査によると、68.2%という数字が挙がっています。

更に、「経験年数（の短さ）」の課題では、3年未満が3分の1という地域が少なくない上、初任の担当者が20%いるその内56%

が一人担任、という地域も挙げられています。つまり、担当者の数と経験年数が追いついていない現状が課題として示されているのです。

これらのことは、ここ数年、継続されて取り上げられている課題となっています。

3. 全難言協が考える「専門性」

こうした現状を踏まえ、全難言協では「専門性」を、

- ①子どもとかかわる「かかわり手」としての力。
 - ②保護者や在籍校の先生方、関連機関や仲間とつながる力。
 - ③難聴・言語障害やその教育に関する専門的な知識や技能。
- と考えています。

一般に「専門性」というと、その知識や技能に関することを指すことでしょうか。この教育においても、その重要性は変わりありません。しかし、その知識や技能は一朝一夕には獲得できません。

全国の初任の担当者のほとんどが、初めての経験として現場に立っているのですから、こうした専門的な知識や技能に初めて接するというのが現状です。そして、そうした状況の中で、指導を行っていかなければならないのです。

余談になりますが、私自身、「通級」という言葉も知らない全くの素人教員として、初任の担当者となっているだけに、その大変さは十分に分かっているつもりです。

【かかわる力】

だからこそ、大事にしたい一番目が、目の前にいる子どもと「かかわる力」になるのです。

その子にどんな課題があるのか、保護者はどんな心配や不安を持っているのか、ということ念頭に置いて子どもと接することになりますが、まずは、その子がどんなことを好きで、何が得意で、どうしたら笑顔になるのか、といったことを探していくことが大事だと、私は考えています。

どうしてかという、私たちがかかわる子どもたちは、保護者の主訴となる課題があることで、学校や学級の中で傷ついたり不安が大きくなっていたりしている場合が多くあります。そしてそれが、二次障害のように「自己肯定感」を低下させているのです。

私は、私たち担当者の一番の役割は「自己肯定感」の向上に尽きると考えています。

この教育においては、「障害を見るのではなく、その子を見るのが大事である」と言われます。このことも、自己肯定感を高めるための大事な視点だと考えます。

例えば、《サ行が正しく発音できないAちゃん》ではなく、《妹思いで折り紙が得意でお絵かきが好きAちゃんはサ行の発音が苦手である》と捉えるなら、サ行の発音改善に関する専門的な知識や技能が未熟であっても、Aちゃんの自己肯定感を高めるために「かかわり手」としてできることは、たくさんあるのではないのでしょうか。

【つながる力】

そうしたできることを考えたり見つけたりするためにも必要なのが、二番目の「つながる力」です。

担当者が一人であっても、通ってくる子どもが一人いたら、その子の保護者がいるわけです。その人たちを、子どもの課題の解決や心配や不安の軽減・解消に向けた「仲間」と捉えれば、子どもにかかわる人間は決して

一人ではないのです。

個別指導計画や支援計画の作成に当たって保護者と話し合うことは必要不可欠ですが、それ以上に保護者の力を借りるという視点も忘れないでほしいと思います。

同様に、子どもの在籍学級の担任の先生方も「仲間」だと考えていくことが大事です。

更に、その地域の研究会のメンバーや「親の会」の方々ともつながっていければ、「仲間」の数は増えていくのです。

特に「親の会」に関しては、その地域にあるかどうかも含めて情報収集をしておくといいでしょう。新人の教員が話す支援の内容よりも、先輩の保護者から教えてもらう経験談の方がずっと役に立つ、というのは、私の経験からも証明されています。

同じような悩みや経験を持つ保護者同士の学び合いや励まし合い、支え合いの場を、ぜひ教室での指導と合わせて作っていくことをお勧めします。このことは、子どもや保護者だけでなく、教員にとっても有効な「仲間」となるに違いありません。

全難言協でよく使われるフレーズに、次のようなものがあります。

「今すぐ、できる人・わかる人になるのは難しい。でも、今すぐ、できる人・わかる人とつながることはできる」

これこそ、まさに「つながる力」ではないのでしょうか。

さて、保護者とつながることに、もう少し付け加えます。

実は、私たちの指導は子どもに対してだけではなく、その保護者への支援も大変重要です。

時には、子どもの実態とかけ離れた保護者の願望を聞くこともあります。その願望ゆえ

にしんどい思いをしている子どもに出会うこともあります。

こうした親子を支えるのは、私たちの大事な役割です。一番目に挙げた「かかわる力」は、子どもの“今”（現状）を大切にする力でもあります。その力を、保護者と共有していくことが、保護者支援につながるのだと考えています。

【専門的な知識や技能】

そうして、三番目に専門的な知識や技能を挙げたわけです。

この専門的な知識や技能は、経験の浅い先生に必要なだけでなく、ベテランの先生にも必要なことです。これは、担当者である限り努力して獲得していかななくてはならない力でもあります。

専門的な知識や技能が加わったなら、「かかわる力」や「つながる力」は一層強力に、有効な「専門性」として効果を発揮していくことでしょう。

ぜひ、日々の研修を続けていっていただきたいと願っています。

4. 全難言協の取組

最後に、全難言協が取り組んでいる「専門性」の課題解決へ向けての事業を報告します。

- ①『きこえとことば研修テキスト』を作成し全設置校に配布。
- ②そのテキストを主として用いた夏期全国研修会「はじめのいっぽ」を、経験年数が3年未満の担当者を対象として毎年実施。
- ③全国の各研究会の専門性向上のための取組を全国理事会や機関誌、ホームページ等で紹介（情報の収集と発信）。

全難言協では、これからもこうした活動を

続けながら、各地区の研究会の研修の充実を応援していきたいと考えています。

5. おわりに

大阪の大会でのパネルディスカッションの中で、コーディネーターの竹田契一先生は、エビデンス（経験則頼みから脱却し、根拠に基づいて指導する考え方）が問われるようになると話されていました。だからこそ、今回の全国大会のパネルディスカッションでは「専門性」について話し合われたのだと思いました。

今、通級児の数は増加し続けています。ニーズは増すばかりです。この現状を、エビデンスとは言えないでしょうか。そんなふうにも思います。

そして、そんな時代ですから、「専門性」の向上はもちろん、継続したり維持したりすることも重要な課題です。

だからこそ、今、一番大事にすべきは、これまで述べてきたような「専門性」が必要とされるこの教育の“魅力”を積極的に伝えていくことではないか、と私は考えています。

経験年数の短い人も含め、先生だけでなく保護者も、また関係する方々も、この教育に携わる全ての方々と一緒に、この仕事の“魅力”を、すばらしさを、楽しさを語っていくこと。そこから、「専門性」は広がり向上していくのではないのでしょうか。

そんな語らいの場が、各地区の研究会の中に生まれ、充実していくことが、全難言協の果たすべき役割かもしれないと、事務局長の任を降りた今、考えているところです。